

〈Afterwords〉

2007年春に始まった本曲集の制作ですが、最初の頃は割にハイペースで作品を書いていた。いま振り返ると、“無知がゆえ”のひとつのプロセスだったかとも思われます。とはいえ、初期の作品を気に入っていないかといえばそうでもなかったりします。音楽言語が稚拙な分、面白さや逸脱があったりして今となればそれも良い経験だった気がします。制作が進むにつれ、なかなかメロディや発想が浮かばず、独り医局（当直中）で悶々とした夜を送っていました。私は“天から音楽が舞い降りてくる”タイプではないため、人知れず裸足になって踊ってみたり、仮想オーケストラを頭に浮かべ指揮者の真似事（Air Conductor）を試してみたりと、とても他人様にはお見せできる姿ではありませんでした。それでもなんとか、完成まで漕ぎ着けることが出来ました。ほんとうはストリングスや打楽器を入れ、アレンジ版〈dis-Piano"ver.Gorgeous"〉という構想もあったのですが、エネルギー切れのため、ボツになってしまいました。

当曲集の音楽的印象としては、ポップスとクラシックの中間的なものかと思われます。ギターがメイン楽器である自身にとってピアノで作曲をする際の発見は、コードに縛られずにさまざまな使いが可能であるということでした。音型やメロディの断片を繋ぎつつ、そこにわざと不自然な音を入れてみたりという作業はとても新鮮な体験でした。それでもなぜかロックスピリッツ(?)を曲に封じ込めようと腐心してみたり…、自らの習性のようなものからはなかなか逃れられないものです。自分的にはこれらの曲の背景に、今まで聴いてきた多くの商業音楽が見え隠れしています。

2011年春、段々と終わりが見えてきたので、次はより良いCD作品にしようと、Desk Top Music（PCで作る音楽）の情報収集を始めました。それまでは楽譜ソフト（Music Score Pro2）で書いた楽譜をmidi-fileで保存し、それをAudio Data（wave-file）に変換し、CD-rに焼いて聴いていました。ところがPCに内蔵された基本音源は、かなり貧相な音質であるため、最終形態の“作品”とするには抵抗がありました。そこで、あれやこれやと、DAWソフト（データ化した音情報を加工・編集する）や音源ソフトについて色々と勉強してみました。しかし、調べるうちに「自分には無理だ」と思うようになりました。幾つかの理由はありましたが、結局は「音を聴き分ける耳に自信が無い」というのが最大の理由でした。選ぶ音源の音色、音の強さ・弱さ、テンポ等の音楽的コントラスト、エコーやリバーヴを用いた音響処理、等、多くの課題がありました。せっかく最初で最後の作品集を作っても観賞音楽として後悔を残す作品になっては、その意味が半減してしまう。「さてどうしよう?」という日々が続きました。いちおうこの時期各種音楽ソフトを買い、PCも新調したのですが、それらのインストールディスクは最後まで封を開けぬままとなってしまいました。

この時、一人の知人が脳裏をかすめるのですが、それがもちろん片岡祐介さんなのです。彼は、フリーのミュージシャンで音楽療法の勉強会を通じて2005年に出会いました。最初にセミナー講師として当地へ来られた際、激しい雨の中、大分空港から当院（オレンジ病院）へ着くやいなや、ピアノを弾き始め、その確かな技術と感性に驚きと感銘を覚えたことを思い出します。（こちらは、勝手なイメージで彼のことを即興系・現代音楽系・ひょうきん系のPercussionistで、まさかピアノなど弾かぬだろうとタカを括っていました）またセミナーでは、皆で演奏した音楽を録音・マスタリングしその場で聴かせてくれたり、トークの最後「音楽をする人は“おと”を大切にしてください」

と少し照れながら語られていたことが思い出されます。その後、今度は私が出張で東京へ行った折、彼が参加している鍵盤 Harmonica ユニットの練習を見せていただいたり、共に飲んだり、という交流をさせていただきました。そういうなかで彼の音楽的守備範囲の広さと音楽に限らず発想の豊かさを知るようになったのです。「そうだ、彼に頼もう！」直感的に閃き、久しぶりに連絡を取ってみたところ、依頼の趣旨をご理解いただき、快く音源化作業を引き受けてくださりました。

この時期から、私は曲の再々チェックと CD ジャケットや楽譜集などの作成、片岡さんは楽曲の特性に応じた録音方法の選択とその実行、という並行作業が始まりました。この間、片岡さんは、2度に渡り当地へ足を運ばれ、私も今年春、最終作業を見届けるため片岡邸を訪問させていただきました。そのような交流ができたのも、まさに今回のピアノ曲集を書いたお蔭で、普段医師としての日常を送っている私にとってはなかなか経験することのできないプロミュージシャンとの音楽的日々でした。かけがえのない思い出となりました。作業のなかで彼は「まず楽譜を整えて多くの人（Pianist）に弾いてもらいやすい楽譜を作ろう」と提案してくれました。確かに私自身ピアノをあまり弾けないため、また PC データ化を優先したために奏法上オクターヴに無理があったり、アーティキュレーションの書き込みや調性の設定が不自然であったりする箇所が散見されました。そのかいもあって、この楽譜集もかなりそれらしいものになったのではないかと思います。それにしても“楽譜”とはいったい誰が発明したのか知りませんが、ノーベル賞級の情報伝達ツールだと思いますし、何より綺麗だなあ、といつも感心します。自分では弾けないこの曲達がピアノの上手な誰かに弾かれることを楽しみにしています。

音源に関して、片岡さんには曲によってリアルタイム入力（実際に鍵盤で弾いたものを PC に読み込ませる）とデータ入力（楽譜情報を PC に読み込ませる）を使い分けていただきました。これらの作業は、私にしてみれば、彼の技術と感性に身を委ねた殆んど“丸投げ状態”ではありましたが、完成間近になり、当初イメージしていたものとの違いもあつたりで、何度も細部に渡り意見交換をさせていただきました。改めて音楽イメージを共有することの困難さを痛感しましたが、彼も根気強く付き合ってくださいました。果たして、結果は…？ 私は仕上がりにとっても満足しております。そして彼とコラボできたことをとても光栄に思っています。

最後に、ご協力いただいた片岡さんに感謝申し上げるとともに、この作業を粘り強くサポートいただいた当院音楽療法士 沖田女史にも深謝いたします。お手にとられた皆様におかれましても、時折、聴いたり弾いたりしてお楽しみいただければ嬉しく思います。



-2012.06.01.-

クマモト ショウジロウ <<http://dispiano.web.fc2.com/> umraut@hotmail.com>